

令和7年度認知症多職種協働研修

【報告】

日時：令和7年7月6日（日）13時30分～16時30分
 場所：諫早市健康福祉センター 多目的ホール
 参加者： 61名

◆第1部 認知症フレンドリー講座

講 師：株式会社朝日カルチャーセンター
 「認知症フレンドリー事業」事務局 坂田 一裕 氏



講演内容

「認知症になつたら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」という新しい認知症観を広めていく。

「認知症の人」と捉えるのではなく、「認知症」は本人の一部分であり、その「人」の性格、今までの人生を理解し、「その人らしさ」を大切にする。認知症とともに生きるご本人のリアルな声を聴く事を大切にしてほしい。

VR体験の感想

- ・不安や恐怖、焦り、誰かに助けを求めるくなる。
- ・自分がどうなってしまったのか分からず、一歩踏み出せない。
- ・今まで出来ていたことが徐々に出来なくなり、もどかしい。

アンケートより

- ・社会学的な視点も大変参考になった。
- ・認知症の方やそのご家族の気持ちを少しづつだが、理解できたと思うので、参考にして寄り添えたらと思う。
- ・今までが要介護者の視点ではなく、介護者視点で考えている事に気づかされた。

◆第2部 事例検討



事例検討内容

○どのような場面で困っているか、その時、どのような気持ちで生活しているか？

場面	困り事	気持ち
階段を降りる時	段差が分からぬ	恐怖、不安
通帳を取りに行く時	通帳をきちんと置いていたのに、無くなっている	自分は無くしていない、誰かが盗ったに違いない
妻から出来ていないことを指摘される時	今まで出来ていたことが出来なくなっている	なぜ上手くいかないのか分からぬ

○チームとしてどのように支援していくか？

① 職種の名前	② 支援できるところ		③ 支援が難しいところ	④ ③について協働する職種
	誰に	どのような		
作業療法士	本人・妻	便器の向きの理解等ができる工夫	妻の精神面の負担感を減らす	サービス調整のため、ケアマネ 家族の会等
		役割の再獲得	妻が発散できる場の提供	
認知症地域支援推進員	妻	対応方法	医療や薬について	医師
	地域住民	認知症に対する普及啓発		薬剤師
ケアマネージャー	本人・妻	地域の資源につなぐ	具体的な環境の提案	福祉用具事業所
		介護サービスの調整・提案		訪リハ等のセラピスト
医師		症状の理論を伝えることが出来る	直接(生活の)場面を見られない	各職種

アンケートより

○地域において多職種連携を進めていくために必要なこと

- ・お互いの職種ができる事を知る、多職種の顔の見える関係づくり
- ・自分だけでは難しい場合には周りの職種へ相談、声かけがしやすい環境づくり
- ・常日頃から情報共有やなんでも話せる関係づくり

○今後の業務の中で参考にしたいこと・取り入れたいこと

- ・認知症当事者の声を聞く。
- ・認知症の方の気持ちに寄り添うこと、認知症の方の視点に立った考え方をする。
- ・VR体験で感じた事を地域の人にも伝えたい。

令和7年度認知症多職種協働研修のまとめ

- ・受講者の所属分野に偏りがあった。
- ・「本人視点の大切さに気づいた」という意見が多くあった。
- ・「今後も多職種とのつながりを持てるように参加したい」という意見が多くあった。
- ・受講者は、多職種での事例検討を通して、「互いの役割を確認できた」と評価している。
- ・「多職種へ相談する、連携していきたい」という意見が多く聞かれた。

意見交換

I. 認知症多職種協働研修について

(1) グループワーク

【専門職】

本人の視点に立ったケアを多職種協働で行うために、

- ①医療分野、介護分野、司法分野の参加をより一層増やすには？
- ②研修内容として取り入れられるものは？

【地域住民代表】

自分が認知症になった時、本人に関わる専門職にどのようなケアを望みますか？

(2) 全体共有